

新富町内遺跡発掘調査概要報告書

内田原(うったばる)遺跡

永牟田(ながむた)遺跡

溜水(たまりみず)遺跡

例　　言

1. 本書は、新富町西河原地区における県営農地保全整備事業の計画に伴い平成元年度に実施した西河原地区遺跡（内田原・永牟田・溜水遺跡）の概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 新富町教育委員会

教育長 小田幸一

社会教育課長 野中一弥 同主事 松原富美彦（事務担当）

同補佐 井下吉盛 同主事 有田辰美（調査担当）

宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係 主査 面高哲郎（溜水調査担当）

調査協力 宮崎県教育庁文化課

調査参加者 阿万次男 西川清 比江島猛 平口幸春

本多長利 遠藤義美 石橋幸枝 平美保

上山途枝子 福浦のぶ子 加世田キミ子 長田博子

牛谷恵子 杉尾美千子 西川窈 黒木啓子

土屋枝美子 那賀ミチ子 立野秀幸 荒木崇之

酒井大作 長友智美 鈴木景子 竹重松枝

佐々木典子 児玉いく子 藤原理恵子

3. 本書の執筆、編集は有田が行った。溜水遺跡調査については、面高が執筆、編集にあたった。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の立地と環境	2
第3章	遺跡の概要	2
	内田原遺跡	2
	永牛田遺跡	4
	溜水遺跡	7

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	内田原遺跡位置図	3
第3図	永牛田遺跡位置図	5
第4図	永牛田遺跡調査区配置図	5
第5図	溜水遺跡トレンチ配置	9
第6図	溜水遺跡第8トレンチ土層図及び遺構実測図	10

第1章 調査に至る経緯

平成元年度、新富町大字新田「西河原（にしがわら）地区」「十文字地区」約10haにおいて、県営農地基盤整備事業が計画され、この中を単年度において事業を実施するものであった。こうした中、事業対象地内の埋蔵文化財については、昭和56年に町教育委員会が実施した“町内遺跡詳細分布調査”の際、新田原遺跡等が確認されており、平成元年の農政部局と文化財保護部局との調整、文化財保護部局の独自の成果にあわせ、昭和63年の試掘調査の成果を踏まえ、宮崎県教育委員会文化課、県一ヶ瀬土地改良事務所、一ヶ瀬土地改良区、新富町教育委員会、町耕地課の間で事業対象地内に存在する埋蔵文化財について協議を重ねた結果、新たに発見された内田原遺跡（時代：弥生時代～中世）永牟田遺跡（時代：縄文時代）溜水遺跡（時代：縄文時代）について保存に留意し、事業施工上、現状保存が困難な一部分においては、やむなく記録保存の措置をとることとなった。

本年度の調査は、新富町教育委員会が主体となり、現地調査は内田原遺跡が平成元年7月25日～9月27日、永牟田遺跡が平成元年10月12日～平成元年12月27日、溜水遺跡が平成元年12月11日～26日の各々の期間に行い、県教委文化課に指導を頼いた。



第1図 遺跡位置図

第2章 遺跡の立地と環境

新富町は、県都宮崎市の北約20kmにあり、西に西都市、北に高鍋町、南に一ツ瀬川を界し、佐土原町に接し、東側を日向灘に臨む位置にあり、その町域は一ツ瀬川左岸の主に水田に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に古められている。この洪積台地は広く宮崎平野に広がる平坦面の顯著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面(海拔約120m)、三財原面(海拔約90m)、新田原面(海拔約70m)の三つに分けられる。

第3章 遺跡の概要

内田原遺跡

内田原遺跡は、新富町大字新田(にゅうた)字内田原(うったばる)・寺下(てらのした)に所在し、北側の新田原台地から発達した扇状地形に位置し、南側の一ツ瀬川の沖積平野にはさまれた部分の一部が開析された谷地形に位置している。周辺には、西側 約400mには同じ扇状地に国指定史跡「新田原古墳群」の29・30・31号が山ノ坊地区の集落内にあり、さらに集落の西側 約500m、標高17mの扇状地には国の重要文化財となっている画文帶神獸鏡1面、獸帶緣神獸鏡2面の出土した山ノ坊古墳があり、山ノ坊地区から竹瀬地区の北側にあたる新田原台地の縁には「新田原古墳群」の円墳・前方後円墳が点在している。

今回調査の対象となった字内田原は水田として利用されていたが、北東側の比高差1~2mの段丘面には字寺の下があり人家が所在している。更にその北東側 約120mには真光寺跡と伝える場所もあり山ノ坊集落と麓集落の境界ともなっている。南側 約300mには県道下富田~西都線が東西に走り、付近には大門、桜木など寺との関係も考えての発掘調査となった。

調査は試掘調査の結果から字内田原の水田(約1,600m²)とし、その他は工事立ち会いで確認することとした。

なお、水田の土層は、第Ⅰ層表土(水田耕作)、第Ⅱ層耕作土(水田耕作面)、第Ⅲ層黒色土があり、粒子が細かくほとんど遺物はみられない。第Ⅳ層黒褐色砂質土で保水性が高く、一時期、耕作(畑)の可能性がある。第Ⅴ層は黒褐色土(水田耕作面)で上層とは完全に剝離する。

調査の結果、確認された遺構は、備前の大甕片を共伴する溝状遺構1条、その他時期不明の溝状遺構4条があり、漆器（漆膜）を共伴するピットのほか、掘立建物1棟（時期不明）と多数のピット群があり、この中には、掘立建物数棟がたつものと思われるが最終的に確認した面は、水田面に利用された第3面での確認となり、柱穴の新旧が埋土からの判断にまかされる結果となり、時代特定は今後検討が必要である。

なお、当地は水田→客土（宅地）→水田→客土水田の経過をたどっており最後の客土は、地主の証言より昭和42・3年頃のことである。第2回目の客土も明治期の新田開発によるものと思われる。

出土した遺物としては、土器として青磁塊破片、菊花皿片1点、白磁塊破片1点、染付皿片があり、備前焼大甕片摺り鉢片があり、糸切底土師皿片が多数出土しているが、そのほとんどは、良好な状態での出土ではない。これらは、14～16世紀にかけての年代幅を持っており、同時期のものとして、漆器椀の漆膜が1点出土している。その他として、古墳時代の須恵器片、無茎の石鎚1点など流れ込み攪乱による遺物もみられた。



第2図 内田原遺跡位置図

永牟田遺跡

<調査の概要>

調査区は、昭和56年度調査を行った新田原遺跡の西から北に開拓された谷が新たに北東側に分岐する交点にあたり、条件的には良好な位置を占めていた。特に新田原遺跡の時代的、立地的な観点から谷部分には弥生時代後期の水田の可能性が、またその周辺には集落の広がりを確認する上でも重要な地域であった。しかし、調査に平行した水田部分の試掘の結果では最近の改変により水田耕作面である黒色土層の下にはほとんど火山灰系の粘質土（白色）がそのまま残り、当初の期待された弥生時代の遺構は確認されていない。

調査は、谷の交差する地点の東側中心に行いその中を調査の便宜上、北からそれぞれA・B・C区（約2,000m²）に分けて発掘調査を行った。

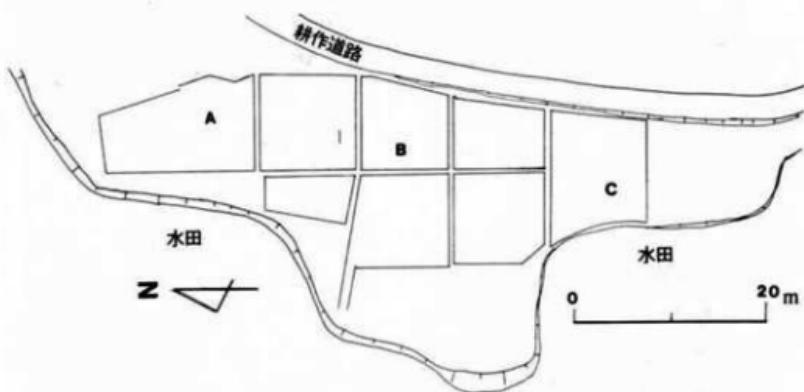
なお、当地の基本土層は南側に比較的良好な当地方の基本的な層序がみられ、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層、第Ⅳ層暗褐色ローム層（含小白斑）、第Ⅴ層黒褐色ローム層、第Ⅵ層明褐色ローム層であり、調査区全体のうち西側傾斜のために第Ⅱ層の黒色土が多く堆積していた。北西側は第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層アカホヤ層は削平されており、第Ⅳ層暗褐色ローム層（含小白斑）、第Ⅴ層黒褐色ローム層の風化した土層の中に集石遺構を持つ文化層があった。

調査の結果、確認された遺構は、A区で集石遺構関連の焼石が、B区では集石遺構が1基だけが確認されている。C区、その他には遺構は確認されず、遺構の存在が推定された高い部分は擾乱のためか土器の小破片が耕作土の中に認められたのみである。1号集石は径約50cmの僅かに窪む程度の掘り込みの中に貝殻条痕文土器の破片が1点出土している。焼石は円礫を主体にしていてあまり角礫化していない。

出土した遺物としては、チャート製の無茎鏡15点、姫島産の白い黒耀石製1点、チップ約20点、チャート製のチップ約500点、土器としては、貝殻条痕文土器が主体で約40点の破片が出土しており縄文時代早期～前期の集石遺構に伴うものと思われる。他には弥生土器の破片が数点、古墳時代の土師器が数点、時代不明の陶器片が数点、出土しているが流れ込みの可能性が大きい。姫島産の白い黒耀石1点、チップ片はアカホヤ層上面の風化層で土器を伴わない状態の出土であり周辺に開通の遺構が存在する可能性がある。時代的にはアカホヤ層降下からあまり下らない時期が考えられる。その他は第Ⅳ層暗褐色ローム層（含小白斑）のなかでの出土で縄文時代早期～前期の時期が考えられる。



第3図 永牟田遺跡位置図



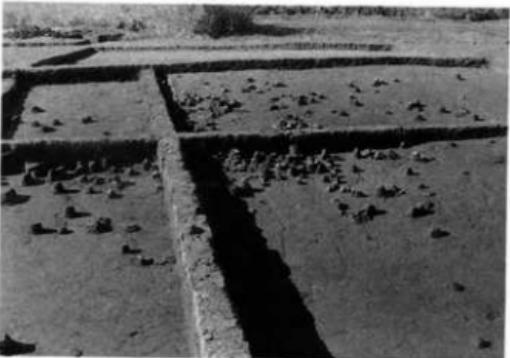
第4図 永牟田遺跡調査区配置図



内田原遺跡 溝検出状況



内田原遺跡 1号掘立建物



永牟田遺跡 B区焼石検出状況



永牟田遺跡 1号集石遺構

溜水遺跡発掘調査概要

1. 遺跡の位置

溜水遺跡は、新富町の西約3km航空自衛隊新田原飛行場の南の標高67mの台地上に立地する。遺跡のすぐ北西には湧水があり、台地との比高差が10数mの浸蝕谷が形成されている。現在、水量は少ないが以前は豊富であったらしい。遺跡では耕作中石垣が採集され、新富町の遺跡地図では弥生時代の遺跡として報告されている。調査中の分布調査でも土器片の散布が認められる。

2. 調査に至る経緯

宮崎県一つ瀬土地改良事務所では、本年度、溜水から城元へ往60cmの送水管を埋設するのに伴い、工事予定地内に所在する文化財の取扱いについて県文化課へ協議あった。工事予定地が溜水遺跡の一部にかかり、幅1mほど掘削して送水管を埋設する工法であったので、工事着手前の発掘調査が必要との結論になり、調査は新富町教育委員会が受託した。なお、遺跡は地形上周辺に広がることが予想されたので、発掘調査対象地は県道以東約200mとした。

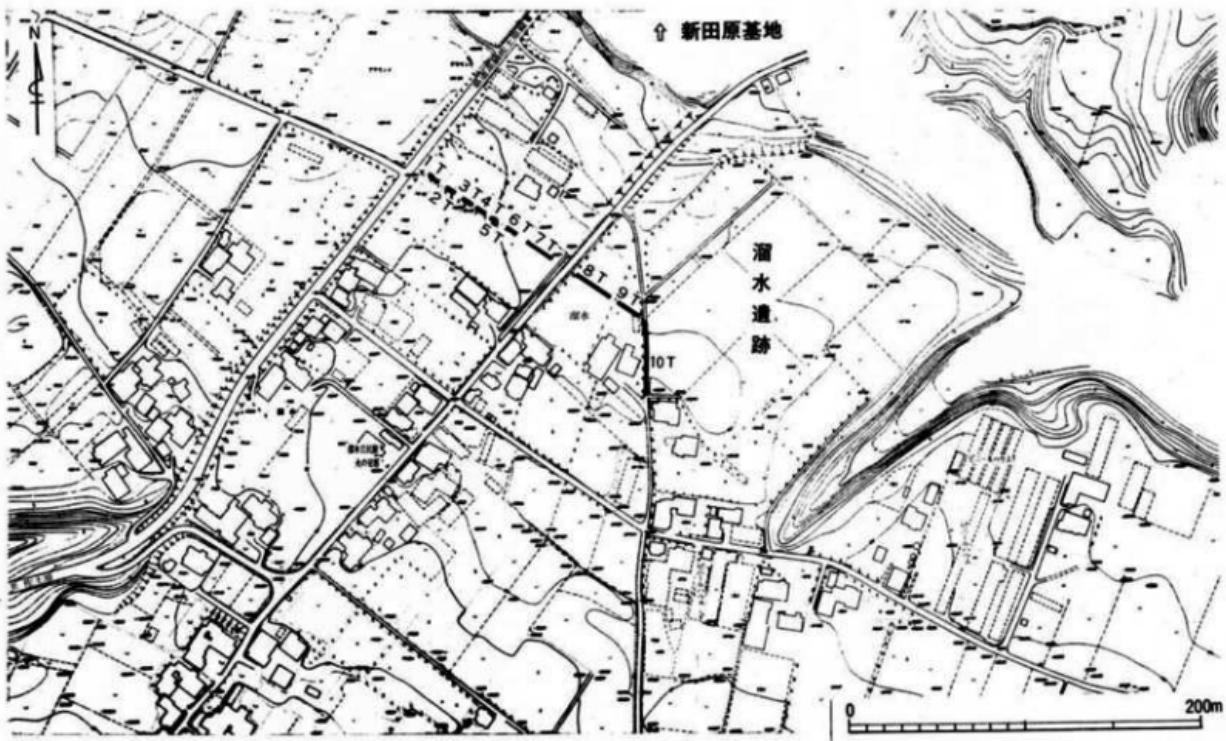
3. 調査の概要

調査は、送水管埋設部分で実施した。トレンチは10か所設定し西より第1トレンチ、第2トレンチ…と呼称した。当地の基本層序は、第Ⅰ層表土（耕作土）、第Ⅱ層黒色土、第Ⅲ層アカホヤ（第1オレンジ）、第Ⅳ層バミス混じりで硬質の黒褐色土、第Ⅴ層小白斑（石英）を含む黒色土、第Ⅵ層小白斑を多く含み、やや硬質の黒褐色土、第Ⅶ層小白斑を多く含み、少量の小林ボラのはいる硬質の黒褐色土、第Ⅷ層黒褐色土でやや暗い硬質の黒褐色土がブロック状に入る。小白斑を含む。第Ⅸ層ボラ粒、小白斑を含む暗褐色土、第X層A.T（第2オレンジ）である。第Ⅱ層黒色土は耕作等のため残存している箇所は少なく、第8トレンチで確認されたのみである。また、第Ⅸ層に入る小林ボラは、場所によっては混入が少ないと確認できない箇所があった。

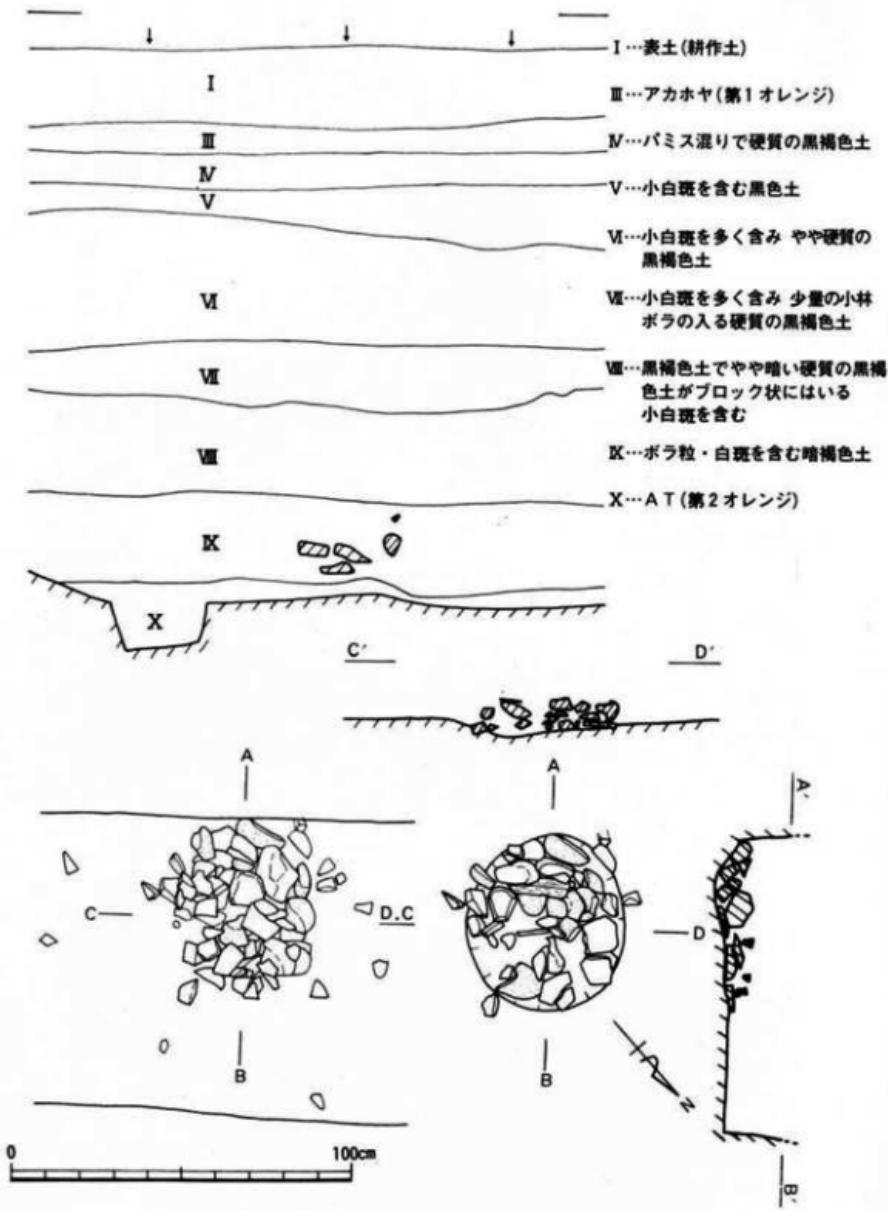
第1トレンチはアカホヤが残存しているが、第2～4トレンチは、植木畑造成等により第V層小白斑（石英）を含む黒褐色まで擾乱を受けている。第5～7トレンチでは第Ⅲ層アカホヤ以下は良く残存し、第7トレンチの第Ⅸ層小白斑を多く含み、やや硬質の黒褐色土で焼石が出土した。第1～4トレンチ以北の植木畑でも焼石の散布が確認されたが、これらは、

縄文早期の集石造構に伴う焼石と推定される。

第8トレンチでは、第Ⅺ層ボラ粒、小白斑を含む暗褐色土の第Ⅹ層AT直上で集石造構、焼石が検出された。集石造構は焼石が長径50cm短径45cmの楕円状に集まり、下部の焼石は配石しており、浅い摺鉢の掘り込みをもつている。使用された石は大半は砂岩であるが、中にはチャート質のもの数個ある。集石造構等に伴う遺物は出土していないが、出土層から時期は旧石器時代と推定される。



第5図 溜水壕跡トレーンチ配置図



第6図 溝水遺跡第8トレンチ土層図及び遺構実測図



第3トレンチ(東より)



第7トレンチ東端



第8トレンチ(東より)



第8トレンチ



第8トレンチ集石遺構



同左



第8トレンチ西端北壁



第10トレンチ(北より)